

Richard Sennett, *Flesh and Stone*

その5: Time in the Body

初期キリスト教のローマ

2008年度大学院講義 後期

鈴木繁夫

身体の苦しみの意味

- キリスト教のローマ

- 苦しみの意味を深く追求する ~~快樂の意味~~
- 身体を超越すること→神に近づくこと



- 場所への愛着を捨てる＝地上の故郷喪失
神はあらゆる場所において、どこにもいない
- 苦しむ他者にたいする同情と配慮
- 弱者は心の内部に超人的力を発見する

キリストがもつ外的身体

- ハドリアヌスが愛した少年アントニウス
 - アントニウスの犠牲的死←キリストの死
- キリストの体
 - キリストには肉体的欲望がない
 - ←ローマ神々：喜怒哀楽とエゴイズム
 - 憐憫から十字架にかかった
- 信仰は国家によって生まれないし、強要されない
 - 神殿はうつろな空間

オリゲネウス

皇帝崇拝の破棄

- 政治と宗教の一線
- 信仰は個人に生活史の中で創造されるもの
 - 改宗は人生に一度だけのもの
 - 祭礼、誓い、そして皇帝にかかわる公務につけない
 - キリスト教と「なる」 ~~「生まれる」~~ → 信仰 = 「なる」
経験

改宗

- 心理的に「さめた」型
 - 新教義に距離をおき、自分の立場を堅持する
- 心理的に「激情」型
 - 現在のあり方に疑問→根源的変化が必要
放浪者(地上の旅人)

「キリスト教徒は、場所、言葉遣い、慣習といった点では他の人間とは異なっていない。自分たちの町を作ってどこかに住むことはないし...異常な暮らし方を実際にするわけでもない。...自分たちの国に住むが、滞在者としてなのだ。...どの外国も、キリスト教徒にとっては母国であり、どの母国も彼らには外国なのだ」(「ディオグナートゥス書簡」)。

日比 孝吉:天理教
稲盛和夫:生長の家

理想的人間像

- 宮沢賢治

- 「内にコスモスを持つ者は世界のどこの辺境に居ても常に一地方的の存在から脱する。内にコスモスをもたない者はどんな文化の中心に居ても常に一地方的の存在として存在する」(高村光太郎)

- 聖ヴィクトルのフーゴー(中世スコラ哲学者)

- 「故郷を甘美に思うものはまだ嘴の黄色い未熟者である。

- あらゆる場所を故郷と感じられる者は、すでにかんがりの力をたくわえた者である。だが、全世界を異郷と思う者こそ、完璧な人間である」

キリスト教改宗：信じているとはキリスト教徒に成りつつあるという経験をする事だ

- × 人間はキリスト教としては生まれない
- 人間は改宗してキリスト者と「成る」

- × 人間は命令されてキリスト者に「成る」ことはない
- 人間は自己変化によってキリスト者へと改宗する


- × 人間は国教によって、その信仰が育まれる
- 人間の個人史において、その人の信仰が聖霊によって生まれなくてはならない

- × 改宗は一度かぎりのものである
- 改宗はその人の生涯にわたって展開するものである

転向してどこに向かうのか

- 改宗者
 - 自分の苦しみ≠キリストの苦しみ
 - 神の愛 ≠人間の欲望
- 肉体の去勢
 - 苦しみに直面し乗り越える努力 > 快楽切断
 - 目をえぐるオイディプース、太陽直視のゾロアスター
 - ↓
 - 快楽・苦痛の限界を超える 馳
- 神の前の平等
 - ~~裸体、観て信じる~~ → 男女・貴賤・職業の身体の平等

ロゴスは光である

- 改宗＝光に照らされるプロセス
 - 神＝光＝偏在するが不在である
 - 信者
 - 肉体の欲望を変質させる→光の力のありがたさを感じる
- 
- 光の体験には建物が必要
 - 建物は採光によって光の存在を顕示する
 - 弱者にこそ建物による補助的支えが必要

キリスト者の居所

- 私邸での会食と説教←Agape(「仲間の絆の賞賛」)

- アテネのシンポジウム: 会食者は同一水準 *ισηγορία*
- ローマの饗宴: 主人と客

– クリエンテラ破壊

– 信仰の段階のよる秩序

- Postulants→Catechumens→Christians

– 会食は「感覚が何も味あわないための試練」

「だから、以前のような生き方をして情欲に迷わされ、滅びに向かっている古い人を脱ぎ捨て、心の底から新たにされて、神にかたどって造られた新しい人を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにしなければなりません。」エフェソ 4:22-4



洗礼と入浴

- ローマの入浴
 - 喧噪の社交場＋身体を清潔にする場
 - 「風呂、酒、女は身を滅ぼす。だがこれらこそが人生だ」
- 洗礼
 - 全裸＋大人のみ→割礼不可



Baths of Caracalla

初期教会

- ローマの司教ディオニューシウス→教会組織化
- コンスタンティヌス帝→公認＋ラテラノ・バシリカ



弱者の神から天の皇帝としての神

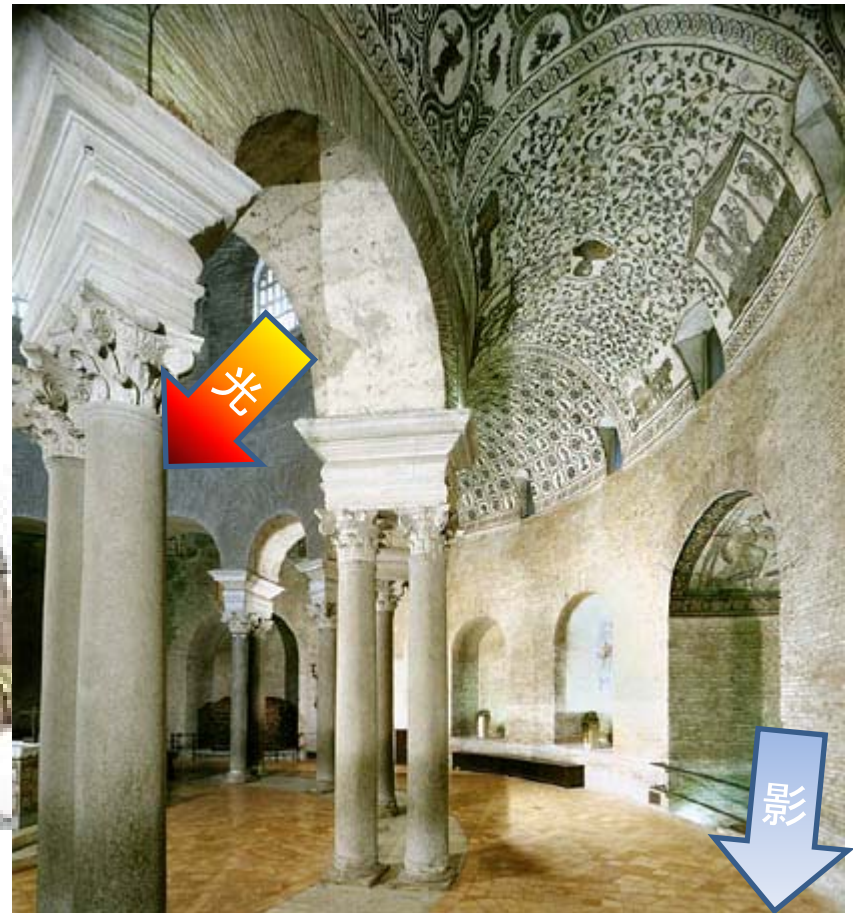
- 教会建築による 聖職者と俗人の区別



「観て、信じる」パターンの復活

Martyrium

- 聖人のゆかりの場所、聖遺物に建てられた小屋
- 聖コンスタンツァの墓



相補的な建築

- バシリカ →王としてのキリスト
- マルティリウム→殉教者・弱者としてのキリスト
ゴート族王アラリックによるローマ征服
- アウグスティヌスの二王国論
 - 人の国(場所への忠誠)と
 - 神の国(時の流れのなかでの巡礼)
- マルティリウム
 - 場所を贖罪化する→改宗が可視となる→石の価値を回復

ニーチェによる鷹と羊

- 鷹
 - － 自らの力量を反省しないから強い
 - － 自らの欲望がもたらす害への配慮がない
- 羊
 - － 猛禽は性来、猛禽であるという言い分による納得
 - － 羊同士の同盟による、社会関係と道徳判断の構築



羊の嘘（「崇高な自己欺瞞」）

「自分たちには魂がある」→「奴が怖い」

● 好きに飲み食いし、色に耽る欲求 『道徳の系譜』(1887年)

ニーチェの誤解

- キリスト者の剛勇
 - 自ら去勢するキリスト者の深い苦悩
 - 強者への対抗
- なまの力の脆さ
 - 他者支配を望みながら、力の正当性を同時に欲しがる

羊とは、鷹の別形(ダブル) ~~鷹の犠牲者~~